

歴史の謎はインフラで解ける

大石久和・藤井聡 編著 を読んで

沸々とした力を感じ、何か動かなければという衝動に駆られた。エネルギーを注入されたかのような感情の高ぶりである。しかし、その感情の一部には怒りにも似たものがある。何に対してなのか。現代の日本においてインフラの本質が理解されていないやせなさなのか、そのことに甘んじている自分に対してなのか。いずれにしても若かりし時の志がよみがえってくる。5月の下旬に発行された本書を読んだ後の想いである。

本書は、日本だけではなく世界の歴史上の節目に、従来歴史家があまり着目していなかったインフラが果たしてきた役割を、丁寧にかつ具体的に解説している。まさに「歴史の謎はインフラで解ける」というタイトルがふさわしい。第一章から第五章までの各節は、それぞれ単独で読んでも、インフラがその時代の文化、文明、都市の発展に、また歴史の転換にいかにか寄与していたかが興味深く描かれており、土木技術者の一員として誇らしくもある。

一方、歴史を学ぶことの本質は単に過去の事実を知ることではない。その歴史上の事実の背景を理解し、何故そのことが起こったのか、どうして成し得たのかを考察することであり、最も重要なのは、それらを踏まえて現代の日本、未来の日本を洞察し、どのように行動していくかということであろう。

そういった観点で第六章は「日本の未来と土木」であり、本書の中核である。第五章までに示した「歴史」という時間軸で見ても、第六章の「現代の日本と世界各国との比較」という空間軸で見ても、インフラが文字通り文化、社会、経済を支えている、い



発行：産経新聞社 刊行：2018年5月

やむしろけん引していることに気づかされる。そのことを本書は様々なデータで分かりやすく示すとともに、未来の日本を構築するインフラの方向性に重要な示唆を与えてくれている。そして終章においては、あらためて「土木」という営為について力強く主張されている。

あらためて身の回りを見てみよう。いかに多くのインフラが自分の生活を支えているか、また、その時々土木技術者の情熱にも気づかされる。

日本の国土に様々な形で働きかけてきた土木技術者の諸先輩からバトンを受けた建設技術者の皆さんに、未来の日本を構築するために本書を推薦いたします。

元国土交通省 九州地方整備局長 なかじま 中嶋 あきまさ 章雅